

子どもの矯正治療、いつから始める？

受け口や乱ぐい歯などケースによって開始時期もさまざま

シリーズ・歯の健康相談

きれいな口元は見た目もよく、本人の自信にもつながるもの。子どものかみ合わせや歯並びが気になったら早いうちに治してあげたいですね。そこで悩むのが矯正治療の開始時期。いつごろから始めるのがよいのでしょうか。「ほりい矯正歯科クリニック」の堀井和宏さんに詳しく聞きました。

子どもの矯正治療は、できるだけ早いうちに開始した方がよい場合もあれば、永久歯が生えそろうってからでも十分治療できる場合など、さまざまなケースがあります。ここでは治療開始時期を4つの段階に分けて説明しましょう。

早期(就学前)から始めた方がよい場合とは

早期に治療を開始した方がよいケースとしては反対咬合(こうごう)、いわゆる「受け口」が挙げられます。年齢が低いほど簡単な装置での治療が可能で、特に就学前は、取り外しが利く装置を寝て



4歳女児の反対咬合の治療前(上)と治療後(下)。取り外しの利く装置を夜間のみ使用して2カ月で改善。



ほりい矯正歯科クリニック・堀井和宏さん

いる間に装着することで治療が行える場合もあります。

小学校低学年が対象になる場合とは

上下の前歯が生え変わるの時期を迎える小学校低学年では、前歯がでこぼこに生えるなど乱ぐい状態になることがあります。

乱ぐいになった前歯を整えるだけでよい場合や、整えておくことでその後の装置装着期間を短縮することができるような場合も治療対象になります。また、歯列を広げて歯が並ぶ余裕を作る場合は、この段階から治療を行うこともあります。

小学校高学年が最適なケースも

すべての乳歯が永久歯に生え変わる小学校高学年は、骨格の成長が著しくなる時期でもありません。下あごの成長が不足している上顎前突(上の歯が前方へ出ている状態)などは、よいかみ合わせに矯正しやすい時期といえます。上あごの前歯を引っ込めながら、下あごの旺盛な成長を利用できるからです。

永久歯が生えそろうた後でも治療は可能

歯がでこぼこに生え、永久歯の抜歯を行う必要があるような場合や、あごの成長に関連しない上顎前突・反対咬合などの場合は、歯が残っている限りは治療が可能です。特に最近では20〜40歳代で矯正治療を受ける人が増

えています。ただし年齢が上がるごとに神経を抜いた歯や詰め物をした治療済みの歯が増える傾向にあるため、早い時期での治療をお勧めします。歯並びがよくなると歯も傷みにくく、よい状態で残すことができます。



歯は歯の裏側から治療可能な固定式の装置の場合

人によってさまざまな要素があり、最適な治療時期がそれぞれ異なる場合もあります。アメリカ矯正歯科学会では、最適な時期に治療を行うため、7歳までに一度は歯列矯正医を受診するように勧められています。できるだけ早い時期に受診し、十分な相談の上、治療時期を決めることが望ましいでしょう。